いやはや、なんというすばらしさなのだ。

私はいま、このCDでいちばん長い「ユード・ビー・ソー・ナイス～」と「ホエン・エア・ラバー・ハズ・ゴーン」の2曲を聴いてしっかり嬉しくなってしまった。

ジャズを聴いて嬉しくなる。そうだびたびあることではない。それどころか新緑新潮を買ってきて叩き割りたくなることだってしょっちゅうなのだ。そうかといってすでに評価の定まったいわゆる名盤のたぐいを再聴するという気にも近頃あまりなれない。旧譜を嬉しがるはもっぱら再発盤のいままで未聴のものに限るのだ。

つい昨日もアーゴ盤の再発、イリノイ・ジャケーの『ボス・オブ・ザ・バラード～プレイズ・コール・ポーター』を耳にしてとイヒイ言えていた。ヒイヒイというのは妙な日本語だが、これ、殿山泰司のお得意フレーズである。殿山は役者だがジャズ・ファンで、特にアーチー・シェップに目がない。ちく玄庫から出ている『Jam Jam日記』を読むといかに彼が漠い前衛ジャズ・ファンかがわかる。そういえばヴィーナスの原さんも負けず劣らずの前衛ジャズ・ファンだ。いや、だった、と過去形にしなければいけない。現在は改心して？4ビートものが好きになった。4ビートが新しい、そしてすばらしいと、私などは頼っべたがくずっぱくなるような嬉しいことをのたまうのである。8ビートは大嫌いらしい。

と、ここまで思いつくまま将来的展望なく書いてきたが、このことは、きっとビル・チャーラップにも当てはまるに違いないのだ。

まさか前衛ジャズからジャズ界に入ったなんていうことはないが、チャーラップにとって4ビートというのは「ヘエ」というものだったろう。だって彼は30代の青年だ。ロックやその他8ビートに囲まれて育ったのだ。もちろんもうすでに知られているように音楽一家に生まれているから、古いジャズは耳にしていたことだろう。たとえそうにしても現代青年だ。ヒップホップや他のジャンルに走ったとしても少しの不思議もない。なにも銅に義理を尽くす必要はないのである。私には娘が二人いるが、二人ともデュラン・デュランとかのロックの世界にうつつを抜かしている。

そうなのだ。ビル・チャーラップにとって4ビート・ジャズ、いわゆるモダン・ジャズは新しい音楽だったのだ。スタンダードもそうだ。スタンダードをめしを食べるようにして育ったチャーラップだが、他のジャンルの音楽との比較の中で、中にわわわわロートルとは異なる「新しさ」を見いだしたに違いない。私などがスタンダードを聴いた第一世代とすれば彼は第二、第三世代なのだ。

当然、接し方が違う。見る目が異なる。われわれがスタンダードを見る目は死んでいるに近いが、彼の目は生きいきとしている。

だからこそ、本アルバムで聴かれるようなスタンダードが新しさを帯びているのである。

スタンダードを生き返らせた男。それがビル・チャーラップである。

さて、ここで冒頭の一文に戻ろう。彼のスタンダード解釈の新鮮さについては後で述べることにして、彼のアドリブのすばらしさについて、まずお話したいと思う。

2曲とも9分、8分という長い演奏である。普通なら退屈してしまう。あなた、アクビをしましたか。私は一気に聴いてしまった。とにかく凄くメロディアスなのである。アドリブというよりフェイクに近い、などと知ったようなことは言うまい。そんなテクニカル・タームなどどうでもいい。とにかく聴いていて前述したようにひわひわと嬉しくなってくるようなメロディーのなんというか、ほほえみを感じてしまうのだ。メロディーがニコニコほほえんでいる。

原曲から外れないアドリブ。常に原曲の面影を皆していてるアドリブ。このことって易しそうで意外にむづかしい作業なのではないだろうか。機械的にフレーズを当てはめていくほうが楽なのではないか。ふとそんなことを考えてしまう。原曲をしっかりと自分のものにしていないと出来ることではなさそうだ。新人ピアニストがあまたいる中でビル・チャーラップならではのことではないのか。

とすると、ビル・チャーラップはジャズ演奏の盲点をついたことになる。

大多数の演奏者は曲のテーマをさっと一瞬出してすぐさまアドリブに移り、延々とそれこそテーマと無関係なフレーズを練り広げていく。それがつまりジャズ演奏のあり方だと思われていたのだ。そこに一石を投じたのがビル・チャーラップ。

延々と続く非メロディアスな無機質アドリブをわわわわはじっと我慢の子で聴いていた。そこに救世主として現れたチャーラップだからこそ拍手をもって迎えられ、CDは羽が生えたように売れていく。そこにはなんの不思議もない。ファンが求めていたものとチャーラップが今りたくてやったことが偶然一致したに過ぎないのである。

すぐれたミュージシャンはたいてい二刀流である。たとえば昔のテナー奏者、ベン・ウェブスター。速い曲のアドリブとバラードの優しさに秀でていた。

わがビル・チャーラップもバラードに気合いが入っている。静かな気合いである。一音もおろそかにしない。一音入魂である。一音入魂のバラード手法。音のタメにもすぐれている。さらに間合いの名手。だからこそ彼の弾くバラードは実にスムースに聴く者の胸に染み込んでくるのだ。

彼は曲を凄く大切にする。いとおしんでいる。だから曲をいたずらにくずすようなことはしない。速い曲こそ少しは彼ならいじ変化させるが、ことバラードについては作曲者が作った通りのメロディーをそのまま弾いてゆく。曲をくずせばジャズ的、という従来の通念をくつがえしたところに彼の新しさがある。

1曲目にバラードのソロ演奏が配置されているが、奇異に感じられた方もおられるのではないか。かく言う私もその一人である。これは彼のたっての希望らしい。どうしてもこの曲を頭に据えてくれ、と。自信があったのだろう。普通はしないことである。

「いそしぎ」もいいが、ソロでいうと私は「モナリザ」が好きである。不思議なことに私は「モナリザ」という曲に飽きたことがない。どんなCDでも「モナリザ」が入っていると買いたくなってしまう。磁石に吸い寄せられる鉄のように。

チャーラップの「モナリザ」を聴いていると、この曲ほどチャーラップに合った曲はないと思う。寂しさを共有しているというか、どうもうまく言えないのがもどかしい。チャーラップは陽気な人ではない。寂しい人というのでもないが。いわく言い難い静謐なムードを持った人。

「イッツ・オンリー・アー・ペイバー・ムーン」に私は大いに惹かれた。どんなCDであれ、私は「この1曲」というのを設定するのが楽しみだが、このCDでいえば「ペイバー・ムーン」ということになる。名演とか名奏とかの言葉で語るニュアンスのことではない。この先、この作品を取り出した時、さてどの曲のボタンを押そうかなという時、よし帰、それが「ペイバー・ムーン」なのである。

この曲はテンポが天下である。通常速いテンポで奏きされる曲をスロー化することは特に珍しいことではない。しかし、不自然な感じを与えることも少なくない。このCDの「ペイバー・ムーン」はまるで作曲された時からスローで演じられているような、そんな印象を受けた。ひょっとしたらこれがこの曲の正しいテンポではないか、と。

曲というのは実にテンポが大事である。そういう意味でチャーラップくらいテンポをあれこれいろいろ考えている人も珍しい。それだけ曲に対して真剣なのである。これまでのジャズ界は曲に真剣なミュージシャンをあまり尊敬しなかった。チャーラップをいい気機にしてミュージシャンの曲あしらいにもっと目が向けられるようになったら嬉しい。世の中に「曲好きのジャズ・ファン」は意外に多いのである。そういう人たちは身をすくめる？ようにしてジャズを聴いているのである。なんといっても「ジャズはインプロビゼーションだ！」と怒鳴ってしまえばそれで勝ちというところがジャズ界にはあるから。でも、もうチャーラップが出てきてこれだけが評判をとり、CDもよく売れ、ファンもついたら、曲好きファンは身をすくめる必要はない。立ち上がって「ジャズは曲だ。インプロビゼーションは曲の弟だ。曲が兄貴だ。したがって曲のほうが偉いんだ」と叫ぶべきだ。

曲好きファンの偉大なる味方がビル・チャーラップである。

最後にメンバーについて。特殊メンバーである。ニューヨーク・トリオは。正規の、というかチャーラップのレギュラー・トリオはピーター・ワシントンのベースにケニー・ワシントンのドラムスである。レギュラー・トリオの演奏とこのCDの変則トリオのプレイとどちらが面白いか。面白いという意味合いではこちらのほうが勝ると思う。

ジェイ・レオンハートにビル・スチュワート。誰が考えたのか、普通は思いつかないコンビネーションだ。たまたま二人の目程が空いていて偶然組み合わされたのかどうか。そうだとしても結果的にドキドキするようなベース～ドラム間係になったのは興味いない。両ワシントンの呼吸はぴったりである。「クロース・アズ・ペイジズ・イン・ア・ブック」という曲がある曲があるが、まさしくページとページのような合い方。しかし、本アルバムは違う。合うような、合わないような。互いに意識しているようなしてないような。ジャズには合わない面白さだってあるのである。私などは昨今は合わない演奏の面白さを狙ったりするのである。そういう意味でぜひBlue Note盤の両ワシントンとの比聴をおすすめしたい。ヴィーナス盤を面白いと感じたら、あなたはかなりのペテラン・ファンだ。

なにはともあれ、前回のNYトリオ『ブルース・イン・ザ・ナイト』に続き、今回もぞくぞくするようなスリルを味あわせてもらった。ありがとう。ぞくぞくする、といっても静かなぞくぞく、じわりじわりとくるぞくぞく。チャーラップならではのぞくぞくなのである。もう今から次作が楽しみだ。【寺島靖国】

The Things We did Last Summer
過ぎし夏の想い出
New York Trio
ニューヨーク・トリオ

1. いそしぎ
The Shadow Of Your Smile《J. Mandel》(4 : 49)

2. 過ぎし夏の想い出
The Things We Did Last Summer《J. Styne》(6 : 33)

3. いつの頃から
How Long Has This Been Going On？《G. Gershwin》(7 : 31)

4. ハウ・ハイ・ザ・ムーン
How High The Moon《M. Lewis》(7 : 45)

5. モナリザ
Mona Lisa《J. Livingston》(3 : 35)

6. 帰ってくれたらうれしいわ
You'd Be So Nice To Come Home To《C. Porter》(9 : 08)

7. ペーパー・ムーン
It's Only A Paper Moon《H. Arlen》(5 : 57)

8. 恋主り時
When Your Lover Has Gone《Einar A. Swan》(8 : 03)

9. 時のたつまま
As Time Goes By《H. Hupfield》(5 : 44)

ピル・チャーラップ Bill Charlap《piano》
ジェイ・レオンハート Jay Leonhart《bass》
ビル・スチュワート Bill Stewart《drums》
録音：2002年4月2,3日　ニューヨーク

＊

Produced by Tetsuo Hara And Todd Barkan.
Recorded at The Studio in New York on April 3 and 4, 2002.
Engineered by Katherine Miller, Assistant Engineer by Eiji Takasugi.
Technical Coordinator by Derek Kwan.
Mixed and Mastered by Venus 24bit Hyper Magnum Sound :
Shuji Kitamura and Tetsuo Hara .
Front Cover Photos : Dennis Stock / Magnum Photos Inc.
Artist Photos : Tetsuo Hara.　Designed by Taz.